

関西地区研究会講演

バベルの塔の神話とアルジェリアの多言語状況： その将来を考える

ベル＝アベス・ネダール
西山教行 訳

要 旨

アルジェリアは多言語状態の国であり、これまでの歴史の中で、さまざまな移住者の流入を経験してきた。そのため、土地の住民は多言語能力を持つようになり、ある言語から別の言語へと交替ができるようになった。しかしこのような言語能力がアルジェリア社会の安定に重大な影響を与えているのだ。アルジェリアにおいてバベルの塔の神話は一つの現実になっていると思われる。

アルジェリアは1962年に独立すると、社会や文化の再編という大問題に直面し、その中には言語整備という課題もあった。しかし、アルジェリアの多言語状況を重要な課題として考察しうる、合理的で科学的な思考に基づく言語政策がなかったために、現在に見られるような結果となった。すなわち、アラビア語使用者はフランス語に対して復讐心とそれに相反する態度を持つようになり、フランス語・ベルベル語（タマジクト語）使用者はアラビア語を完全に軽蔑し、そしてタマジクト語は周辺化されている。このような言語状況の中で、将来はどうなるのだろうか。

一つの世界秩序のもとにグローバル化された世界において、言語的多元性を積極的に捉え、すべての言語にその地位にふさわしい地位を回復させ、正当な場を与えること、そして合憲性のもとに、その中でもアラビア語に第一人者の地位を与えることが欠かせない。

アルジェリアの民衆はアルジェリア・アラビア語やベルベル語（タマジクト語）で怒りを表し、フランス語で愛を語り、古典アラビア語で神に祈り、嘆願する。現代の政治家はこれを理解する必要がある。

多言語状態、言語整備、言語実践、アラブ化、アルジェリア

はじめに

歴史からみると、アルジェリアは多言語状態の国であった。歴史を振り返ると、アルジェリアの大地には数多くの言語が到来し、タマジクト語という現地語の上に堆積していた。それらの言語は、交易や文明の発展、あるいは植民地支配を受けて、その後アルジェリア人のアイデンティティとなる多数派の言語、すなわちアルジェリア・アラビア語に根痕を残した (Maougal 2001 : 37)。しかしながら、この言語は学者語ではなく、民衆の間での口頭表現に使用される言語であった。このためアルジェリア・アラビア語の社会的役割は本質的に限られたものであり、日常生活の中でのインフォーマルな会話で使用されるにとどまっており、この役割は、現在にいたるまで口頭で伝承される言語であるタマジクト語と同じである。そのためアルジェリアは 1962 年の独立以来、長い伝統を持つ書記言語を必要としていたのである。これには二つの可能性がある。すなわちフランス語と、「フスハー」と呼ばれる古典アラビア語である。

フランス語は学者語であると同時に、公的に使用される言語という役割を植民地時代に効果的に果たしてきたと言わざるを得ない。アルジェリアにおいて、古典アラビア語はフランス語よりも以前から存在していたにもかかわらず、以下の理由から、なんら抵抗も示すことなく周辺的な地位にやすやすと追いやられたのである。

すなわちフランス人植民地主義者が自分たちの言語を押しつけようとしたこと、またオスマントルコ時代のアルジェリア政府では古典アラビア語が使用されておらず、オスマン朝のトルコ語のみが使用されていたことがあげられる。ちなみに占領者となるフランス人が到来するときまで、アルジェリアは 300 年にわたってイスタンブールのオスマントルコの主権下に置かれていた。さらにアルジェリア人の非識字率が非常に高かったこともあげられている。ごくわずかなイスラーム神学者のみが、説教や講話を行うために古典アラビア語を習得していたのである。

フランス語の維持も第二の選択肢としてあった。この選択肢は 1962 年には自明のこととなるが、これはアルジェリアの革命家たちの掲げるアラブ民族主義政策の方針に反するものだった。彼らは、フランス植民地主義に結びつくような、あらゆる社会・経済的、文化的指標を排除し、それを新たな独立国の指標に置き換えようとしたのである。逆説的なことに、それはイスラームや非宗教的なアラブ民族主義によって象徴されるのである。

1. フランス語と植民地支配ならびにアルジェリア解放戦争

アルジェリア人は、フランスが植民地支配を行ったいくつかの国と異なり、50年以上にもわたり、ジュール・フェリーの創設した、非宗教的で義務教育の小学校やフランス語を文化的な理由から無視してきた。その後もフランス語による公教育はまったくアルジェリア人の利益とならなかった。またフランス植民地当局も「原住民」教育に政治的意思を示すことが全くなかったとも言わねばなるまい。ヨーロッパ人とアルジェリア人の就学率には厳然たる格差が存在した。フランス語による教育を受けたアラブ人の子どもの割合は、1911年に3.82%、1954年には16.58%と実に微々たるもので、1880年にフランス人高級官僚は次のような発言を行うほどだった。「我々は原住民教育を征服以前の状態以下に引き下げた」。また別の証言は、「1830年の時点で、アラブ人は読み書きができたが、50年間の植民地支配によりアラブ人は無知蒙昧に追いやられた」と伝えている。植民地当局は教育政策によってある種の矛盾に陥っていたのである。すなわち「学校へ通わせることは異文化への同化であるが、それはまた意識の目覚めを促し、植民地の支配関係を疑問視させるものであった。」(Kadri 2008)

また20世紀初頭にもアルジェリア人はフランスの植民地体制に抵抗をした。アルジェリアのいくつかの名家では子弟を中近東に送り勉強させることもあったが、おおかたのアルジェリア人は子どもをフランス学校に通わせず、無知の状態にとどめていた。その一方では、わずかなエリート層にはフランス語とアラビア語のできるバイリンガルのアルジェリア人も確かに存在し、彼らは西洋思想に好意的で、フランス語による教育を評価していた。この二者の態度は、その後「フランス語使用の近代主義者」と「アラビア語使用の伝統的イスラーム主義者」の対立をまねき、アルジェリアは今日にいたるまでこの問題に悩んでいる。アルジェリア人は、脱文化化の企図に事実上たえず抵抗していたのだが、とはいえ教育を放棄したり、学校の価値を認めてこなかったものではない。フランス学校が新たな自由をもたらし、フランス語を学ぶことにより、アルジェリアで仕事を見つけ、フランス本土で仕事を探す許可を得て、生活を改善することができるを知るや、すべては一変したのである。

1949年から、ムスリムの子どもの就学率は急上昇し、その結果、就学率の上昇のスピードはそれ自体激増していた若年人口の増加に較べて、およそ20倍に高まった。それにもかかわらず、初期段階での小学校での就学率が遅れたことから、中等教育や高等教育に進むアルジェリア人の数は上昇しなかった。そのため1959年にアルジェ

リア人は、中等教育の定員の25%を、また高等教育の定員の10%を占めるにすぎなかった。学校教育は管理されていたと共に、制約されていたのである。つまりアルジェリア人がある一定の教育水準を越えることは認められなかったのである。フランスの植民地教育制度はアルジェリア人の階層化や流刑、排除の上に機能していたのである。

入植者やある種のフランス人移民はアルジェリア社会を支配し、自分たちの言語を押しつけたのかもしれない。実際のところ、フランス語は、行政や教育、公共の掲示物でのほぼ唯一の言語となった。1938年になると、フランスの法律はアラビア語を「アルジェリアの異言語」とまで宣言した。

第一次世界大戦後にアルジェリアにおける民族運動は発展したが、これは都市部のブルジョワ・ムスリム層においてだけではなく、フランスの工場で働くアルジェリア人労働者にも広まっていった。彼らは同僚のフランス人労働者との接触から、労働組合やフランス共産党の中で自己の権利の擁護を学んだのである。言い換えるならば、逆説的なことだが、フランス語はアルジェリアの民族主義に貢献したことになる。しかしながら、ヤシンやラシュラフが著作で述べているように、フランス語はアルジェリア人に一度も強制されたことはない。アルジェリア人はフランス語を力づくで奪取し、フランス語は植民地主義者の言語ではなく、抑圧されている者の言語となったのである。フランス語はアルジェリア人の声であり、国連、アフリカ統一機構、非同盟諸国会議といった国際機関にアルジェリア人の大義を伝えることのできる声なのである。1954年11月1日のアルジェリア解放戦争の宣言はフランス語で執筆され、民族解放戦線の歴史的リーダーの行った宣言もみなフランス語で書かれた。アルジェリア共和国臨時政府代表も1961年のエヴィアン交渉にあたって通訳を必要としなかった。彼らは、ルイ・ジョックスやロベール・ビュロン、ジャン・ド・ブロリといったフランス代表団に向かい、交渉を行い、重要な合意文書に署名をしたのである。これまで植民地経営を行ってきたフランスは、アルジェリア民族解放戦線の正統性をその文書の中でようやく認めると同時に、アルジェリアに居住するフランス人の本質が植民地主義的であることを認めたのである。その当時、アルジェリア代表団の数人のみが古典アラビア語を使えるにすぎなかった。つまり、アルジェリア革命の言語は占領者の言語だったのである。民族解放運動の指導者はみなフランス学校に通ったが、彼らは意識の目覚めにフランス学校の果たした役割が重要だったと告白している。現在になって、フランス語を敵の言語と考えるのは遺憾である。アルジェリア革命はフランス語をアルジェリア人民のものとし、アルジェリア化したのである。今日では、マグレブ・フランス語を論ずるのではなからうか。

2. 独立期のアルジェリアにおける言語問題

内戦と苛烈な権力闘争のたゞよう雰囲気の中で、1962年7月5日にアルジェリアは正式に独立を獲得した。その当時アルジェリア国内に存在していた言語は、アルジェリア人民の話していたアルジェリア・アラビア語とベルベル語という二言語に加えて、フランス語、また西部のいくつかの地域ではスペイン語であり、さらに東部のところどころではイタリア語も話されていた。古典アラビア語は典礼の言語であり、誰も話す人がいなかった。新たに独立を獲得したアルジェリアはその歴史を継承し、言語的多様性を特色としていたのである。ところがアルジェリアは独立すると、ただちに少数の支配者集団に取り込まれ、彼らはアルジェリアの言語問題の将来に重要な役割を果たすようになる。厳格で強固な力を持つ、少数グループが国家権力を握ってしまったのである。そして、統一国家の建設には、ひとつの宗教、ひとつの言語、ひとつの政党が必要であると主張したのである。

1963年になると、当局は古典アラビア語を公的機関や、国家と市民間のコミュニケーションを行う媒介の道具とすることとなる。このような観点から見ると、アラブ化政策は時期尚早の措置だと判断される。アラブ化の広がりには人々を刺激したものの、フランス支配がもたらした人格否定という苦しい体験のためか、これは国民すべての合意を見ることがなかった。アラブ化政策とはアルジェリア民衆の利益というよりも、アラブ民族主義者の考えによって作られた方針だったのである。アルジェリア人、少なくとも一部の強硬なアルジェリア人がアラブ化政策やそれを推進したグループを非難するのは、彼らがアルジェリアの社会言語的実態をかえりみることなく、アルジェリア・アラビア語やタマジクト語といった母語を犠牲として、アラビア語を強要するためである。その一方で、フランス語はいかなる形であれ、アルジェリアに確かに根付いている。アラビア語使用者グループは、その後に教育改革を推進するが、それは教育水準を改善し国際的基準にあわせるというよりも、フランス語を周辺の地位に追いやるものだったといわねばなるまい。つまりフランス語の地位を奪い、フランス語を公用語であり、国語であるアラビア語に置き換えることが、アルジェリアの体験した教育改革の真の目的だったのだ。権力者も認識しているように、この改革の結果のひとつは宗教的原理主義であり、これは90年代になると、10数年間におよぶ暗黒時代を生み出した。この時代には、成績不振の子どもの比率が極度に高まり、64%の中学校の生徒が、9年間の基礎教育の成果を示す「基礎教育証書」を獲得できずに、中学校をやめたのである。これが、盲目的なアラビア語政策の学校教育にもたらした悲惨な成果であった。

しかしながら、いかなる法令も、アルジェリアにおけるフランス語の実態やその地位を変えることはなかった。フランス語は132年間の植民地支配の遺産であり、カテブによれば「戦利品」として考えられるのみならず、アルジェリアで卓越した地位を占めている。フランス語は外部世界との接触を可能にする言語であり、科学的知識を伝える言語なのである。その証拠に、メディアや高等教育、家庭、さらにはアルジェリアの話語にフランス語は残っている。カウラ・タラブ・イブラヒミは、このいささか複雑であると共に、対立する言語状況を次のように見事に分析している。

「アルジェリア人は、言語間の競合や対立関係の影響を受けた微妙な言語共存を生きており、これは支配的で規範的な二言語を結びついている。一つは、憲法に定められた公用語の地位を持つ規範的なアラビア語であり、もう一方は、経済活動での優越性により正当化されている、規範的なフランス語という異言語である。この一方で民衆の話語、すなわちアルジェリア・アラビア語とタマジクト語は相変わらず、執拗に糾弾されている。」(Taleb Ibrahimy 1998 : 12)

3. 現在の言語状況とアルジェリア人の言語実践

次に、アルジェリアにおける民衆の話語の共存と、書記言語の問題を論じたい。アルジェリア・アラビア語「エル・ダリジャ」の起源はポエニ語にあり、「奇妙な言語の混淆」を示している (Eliman 2004 : 216)。この混淆はそれ自体この言語の能力を示している。というのも、このアルジェリア・アラビア語は統合的な言語で、言語の主要な基層として重要であるだけでなく、語彙のもろさをも明らかにしているからである。アルジェリア・アラビア語はポエニ語の起源をその構文だけに保持している。私の母語である「エル・ダリジャ」は「言語のメルティング・ポット」であり、そこでは統語構造にふさわしい形で複数の言語、すなわち古典アラビア語、フランス語、スペイン語、さらにはトルコ語までもが溶け込んでいる。

簡潔に言えば、これがアルジェリア・アラビア語の本質である。そこでアルジェリア人の日常の言語活動の中で、アルジェリア・アラビア語がどのような場を占めているかを考えてみたい。この課題に答えるにあたり、ダイグロシアとコード・スイッチングという二つの社会言語学上の概念を検討しなければならない。まずアルジェリアのダイグロシア状況を考えてみたい。アルジェリア・アラビア語使用者にとってエル・ダリジャは母語であるにもかかわらず、これは社会の中で他の言語と共存している言

語である。私は言い逃れをするつもりもないし、さらにはダイグロシアという用語を上位言語と下位言語の対立によって理解するつもりもない。ここではダイグロシアを「二つあるいはそれ以上の言語の共存」という最も広い意味で使用する。トラッグルによれば (Trudgill 1983 : 114)、ダイグロシア状況の中で最も重要な特徴のひとつは、それぞれの言語が社会的機能の上でいくつかの特性を持つことである。そこでアルジェリアにおける、各言語の機能を考えてみたい。

アルジェリアには、エル・ダリジャ、タマジクト語、アラビア語、フランス語の4言語が共存している。大カピリア地方ではタマジクト語と、アラビア語とフランス語はダイグロシア関係にある。これらの言語はそれぞれ特定の文脈で特別な機能を持ち、使用されている。そこでアルジェリアのダイグロシア状況を検討してみよう。

3.1 アラビア語使用者が多数派を占める都市部

ここで最も支配的な言語変種はフランス語であり、これは、モスクでの祈祷やテレビのニュース番組、正確に言えば夜8時のニュース番組をのぞいて、ほぼあらゆる文脈で使用されている。フランス語はつねに上位言語変種とみなされてきた。フランス語は、ごく近年まで知識人や都市生活者の言語であった。金持ちはたとえ非識字者であっても、フランス語で自分の考えを伝え、都市生活者と見なされようとしている。フランス語を習得していないことは、恥ずべきことなのである。その一方で、古典アラビア語を知らないことは当たり前のことなのだ。それでもフランス語は今日にいたるまで、都市生活者の言語であり、あらゆる場で使われている。アルジェリア人は、自分の教育レベルがどのようなものであれ、アラブ人以外の外国人に会った時は、フランス人であろうが、他国人であろうが、みなフランス語を使った。確かに、これまでフランス語は外国との接触にあたり使用する言語であり、また今もそれに変わりない。国家元首ブーテフリカ大統領が公的な会合でフランス語をしばしば使用することからも、フランス語の地位は強化されている。

古典アラビア語はコーランの言語であることから、好意的に考えられていることに間違いはないが、正式な宗教儀礼でのみ使用されており、祈りに必要不可欠な条件である。そのため全世界のムスリムはアラビア語で祈るのである。古典アラビア語の社会的機能のもうひとつは、夜8時のニュース番組で使用されることにある。1976年の憲法は古典アラビア語を公用語・国語と規定している。そしてこのことから、古典アラビア語はテレビの使用言語となり、また司法などの公的機関でも使用されている。これらの場面以外のところで古典アラビア語が使われると、それは皮肉で奇妙なもの

になる。政府当局は古典アラビア語に公的位置を与えたのだが、それによってもアルジェリアのダイグロシア状況は何ひとつ変わるものではなかった。古典アラビア語の社会的機能は限られたままで、いくつかの言語活動に閉じ込められたままだった。

エル・ダリジャ（アルジェリア・アラビア語）は文字化されていないものの、人々の母語であり、生得の言語であるが、非公式のコミュニケーション領域にとどまっている。とは言え、これは下位変種と見なされていない。そもそも下位言語とは存在しない。スポルスキー（1998）の指摘するように、言語とは、国旗を掲げた方言、あるいは軍隊を持った方言にすぎない。話し相手がフランス語や古典アラビア語を習得していない時に、エル・ダリジャは補助言語となる。

アラビア語使用者が多数派を占める都市部において、タマジクト語は社会的機能を持っておらず、これはエスニック・グループではなく、言語的少数派の表現手段となっている。アルジェリア西部の大都市、正確に言えばオランに住むベルベル人が公的空間でタマジクト語により意見を述べるようになったのは近年のことだ。子どもの頃のことを思い起こすと、同じクラスや町に住むベルベル出身の子どもは、我々アラビア語使用者を前にして両親にタマジクト語で話しかけられた時、気まずそうな態度をとっていた。彼らは子どもだったとはいえ、タマジクト語を話すことは我々アラブ人の子どものグループから、いわば自分を排除することだったのである。

3.2 アラビア語使用者が多数派を占める農村部

アラビア語話者が多数派を占める農村部での重要な言語変種は、エル・ダリジャであり、これが優れた表現手段となっている。個人の社会的、知的地位がどのようなものであれ、気に入ろうが入るまいが、アラビア語使用者は自己表現の手段としてこの言語を使用している。これは農村部で誰もが同意している言語である。というのも、そこでは大多数の住民は古典アラビア語、さらにフランス語を習得していないためである。

古典アラビア語は威信のある言語であり続けており、古典アラビア語の習得は、ムスリム諸国で大変高い評価を受けているイスラーム神学とつねに結びついてきた。タマジクト語は、アラブ人が多数派を占める都市部と同じく、農村部でも何ら社会的機能を果たしていない。

3.3 カビリア地方

大多数のベルベル人にとって、タマジクト語はアラブ・ムスリムの文化的「侵略」に対するアイデンティティと統一の象徴である。ベルベル人によれば、古典アラビア語とアルジェリア・アラビア語はベルベル人の長い過去の歴史的遺産である文化の実体を消し去ろうとしている。カビリア地方で古典アラビア語とアルジェリア・アラビア語は社会的機能をほとんど持っていないか、全く持っていない。あるベルベル人過激派にとって、古典アラビア語は「アラブ・ムスリム植民地主義者」の言語であり、拡張主義的植民地主義グループの残した古い残骸であるのだが、この成り行きや法律によって行政や宗教祭儀で強制されてきた。エル・ダリジャは、アルジェリアにおいていかなる法的地位も持たない唯一の言語であるが、つねに古典アラビア語と同一視されるため、何ら社会的機能を果たさない。

ダイグロシア状況は何十年もの間、変わらずに続くことがあるとフェイソルドは述べたが (Fasold 1984 : 39)、それでもさまざまな圧力が何らかの変化を生むこともある。アルジェリアのダイグロシア状況が対立を生む状況であることはわかっている。アラビア語、エル・ダリジャ、タマジクト語、フランス語の4言語は均衡のとれた状態で共存していない。アルジェリアでは、言語に関わる冷戦に毎日のように直面している。アラビア語使用者はイスラーム原理主義者であるとラベルを貼られ、フランス語使用者は裏切り者の「アルキ」であると、そしてベルベル人は分離主義者で無信仰者であるなどとラベルが貼られている。このような状況の中で、アルジェリアの言語的統一について、どのように論じることができるだろうか。エル・ダリジャは国民の合意を得る言語になるかもしれないが、そのようにはなっていない。ベルベル民族主義者がそれを古典アラビア語とつねに同一視するためである。フランス語や古典アラビア語、タマジクト語などの同じ言語コードを所持しないときに、エル・ダリジャは補助言語となる。

アルジェリアのダイグロシア状況を検討することで、国土全体にわたる支配的言語の存在しないことが確認された。この考察で言及した三つの地域の中で、すべての社会的機能を果たしうるような言語を見いだすことはできない。そこで次にコード・スイッチングの概念を検討することにより、アルジェリア人の日常の言語行動について考えてみたい。

アルジェリアにおいて、コード・スイッチングはアルジェリア人の言語行動の特徴である。二言語話者は偶然にまかせて言語コードを変更するのではない。言語コードの選択はイデオロギー上の選択を示している。フランス語使用者が古典アラビア語を

使うことは決してなく、彼らは常にフランス語を話し、相手がフランス語をわからないとき、エル・ダリジャを使う。古典アラビア語を使うことはほとんどない。

アラビア語使用者がフランス語を使うこともまれである。それでも近年は彼らが他の言語へとみずからを開くようになったり、率先して他の言語を使うような場面を目にすることもあり、これは希望のしるしである。二つの言語、すなわち古典アラビア語とエル・ダリジャがコミュニケーションの言語として、あらゆる場面にあらわれている。

ベルベル語使用者にとって、フランス語はベルベル人以外の人々と接触をとるための言語となっている。タマジクト語を習得していないアルジェリア人に対して、ベルベル語使用者が古典アラビア語で話しかけることは稀である。エル・ダリジャの使用はほとんど見られない。

結論

ここまでアルジェリアの言語状況について述べてきた。政治イデオロギーを計算すると、多言語主義がアルジェリアの言語問題を解決する切り札となると言えるだろうし、これがアルジェリアを統制し、制御できる方策だろう。アルジェリアとアルジェリア人民は多言語主義政策を採ることもできたのかもしれない。しかし、言語の豊かさを活かす多言語主義の可能性はつねに与えられているとはいえ、アルジェリア人にとっては政治方針や党派心というものが主たる障害となり、そのためにアルジェリア人はこれまで共生してきたさまざまな言語と平和裡に共存することが、その意に反して、不可能なのである。60年代や70年代のアルジェリアの大統領の好んだスローガン「ひとつの国家、ひとつの言語、ひとつの政党」はいまでも生きている。この時代の大統領は亡くなったが、彼らの残した政治上の残骸、あるいは言語上の残骸はいまもここにあり、国の統一をおびやかす、その将来をも束縛している。アルジェリアにおいて近代化と単一言語主義的傾向は近年の主な動向であるが、新たなポスト・モダンの時代にあって、すべての国家が新たな世界秩序に統合されるにあたり、多言語主義が重要な課題となることを、アルジェリアの為政者にはわきまえてもらいたい。アルジェリアはさほど多くの努力をするに及ばない。というのも、アルジェリアは多言語主義を日々の暮らしの中で生きているからである。アルジェリア人に必要なことは、多言語主義を政治的に認めることである。私は、古典アラビア語を周辺的な地位へ排除するよう主張するものではない。古典アラビア語はいずれにしてもアルジェリアの

言語に他ならない。だが少なくとも、古典アラビア語のヘゲモニーに終わりを告げ、他の言語と同じ地位に定めることが肝要である。とはいえ、古典アラビア語には「対等者の中での第一人者」の地位を与えることが必要だ。このような方法によってこそ、アルジェリア人はアルジェリア人自身と、またその歴史と和解し、将来に向かって楽観的に進むことができるのである。これ以外の解決策をとるならば、混乱と無知があるのみである。アラブ・ムスリムの征服をのぞいて、他のいかなる民族も、オスマントルコやフランス人でさえも、この衰れなアルジェリアにおいて非識字状態を撲滅し、すべての言語を振興する真の政治的意思を示すことはなかった。アルジェリア人は長い間、あまりにも長い間、無知におかれてきたのである。

(アルジェリア・ムスタガネム大学)

参考文献

- Elimam, A. (2004), *EL Darija, langue consensuelle du Maghreb*, Oran: Dar EL-Gharb
- Fasold, R. (1984), *The sociolinguistics of society*, Oxford: Basil Blackwell.
- Kadri, A. (2008), « Histoire du système d'enseignement colonial en Algérie », *Pour une histoire franco-algérienne*, Paris: La Découverte.
- Lacheraf, M. (1978), *L'Algérie, nation et société*, Alger: SNED.
- Maougal, M.L. (2001), « “Intercourse” et échanges linguistiques en Algérie », *Mondialisation et enjeux linguistiques*, Alger: CREAD, 33-48.
- Spolsky, B. (1998), *Sociolinguistics*, Oxford: University Press
- Taleb Ibrahimi, K. (1998), « De la créativité au quotidien, le comportement langagier des locuteurs algériens », *De la didactique des langues à la didactique du plurilinguisme*, Lidilem: Université de Grenoble 3.
- Trudgill, P. (1983), *Sociolinguistics. An Introduction to Language and Society*, Harmondsworth: Penguin.

解題

本稿は、2013年1月12日(土)に京都大学で開催された日本言語政策学会関西地区研究会において行われた、ベル＝アベス・ネダール先生の講演に修正加筆の行わ

れた原稿である。ネダール先生は、アルジェリア西部にあるモスタガネム大学英語学科准教授で、英語教育学、語用論、ディスコース分析をおもな専門領域としている。

さまざまな文明の交差と接触の上に成立したアルジェリアについて、日本での関心は決して高くない。日本において多言語主義を語る場合、ヨーロッパの事例を参照することが多いが、アルジェリアのような北アフリカの事例を参照することは少ない。

多言語主義には二つのタイプがあり、一方には付加価値が高く、他方の付加価値は比較的低い。ここで前者を選択型多言語主義と呼び、後者を生得型多言語主義と称するならば、前者は主に学校教育を通じて母語に加えて複数の異言語を習得し、多くの場合、その言語は国際語や他国の国語や公用語であるなど、言語の威信も高い。このような多言語主義はこれまで積極的に評価され、政策として推進される傾向にある。

その一方で、生得型多言語主義とは、話者の言語環境が多言語状態にあるため、必ずしも学校教育による習得ではなく、自然習得に近い形で複数言語を習得するケースを指す。この場合、習得される言語は、他国で公用語として使われるような威信の高い言語とは限らず、むしろ文字化や標準化の行われていない言語であることが多い。このような生得型多言語主義は必ずしも高く評価されるものではなく、場合によっては、話者自らもその言語能力を正当に評価せず、時にはそれを隠すようなことさえある¹。

アルジェリアの多言語主義、あるいは多言語状態はどちらかと言えば、後者の多言語主義に該当する。問題は、国内が複層的な多言語状態にありながらも、国家がそれを承認せず、あくまでも従来 of 国民国家の論理に従う言語政策を追求する点にある。そこから社会の混乱や教育の停滞なども発生しかねない。

日本の言語教育学がアルジェリアの経験から学ぶべき点があるとするならば、それは多言語主義の複数性にある。ヨーロッパ型の多言語主義は多言語主義の一形態に過ぎず、多様な多言語主義が存在し、国家はそのすべてを推進するものではない。多言語主義は言語教育の振興の鍵だが、ヨーロッパ型の多言語主義を教条化することなく、多言語主義の多様性を踏まえて、今後の多言語主義の行く末を議論する必要がある。その点で本稿は、多言語状態の国が単一言語主義を主張する場合のリスクやその課題を明らかにする点で貴重な貢献といえるだろう。

注

Duchêne, A. (2011). « Néolibéralisme, inégalités sociales et plurilinguismes : l'exploitation des ressources langagières et des locuteurs ». *Langage & Société*, 136

: 81-106. 著者はこの論文ですべての多言語能力が評価されるわけではなく、市場の要請に従って、評価されない多言語能力があることを分析している。